第69回定期演奏会批評

音楽の友 ONGAKU NO TOMO 2010.9月号

Concert Reviews

オーケストラ団 東京ニューシティ管弦楽（第69回）

貴志康一「ヴァイオリン協奏曲」とブラームス「交響曲第4番」が取り上げられた。恒例のプレトークで内藤彰音楽監督は、ノン・ヴィブラート奏法に柔軟性をもたせたいと発言。許容された微かなフィンガー・ヴィブラートのせいか、全体のトーンは柔らかく感じられた。さて、貴志の協奏曲。ソロを受け持つ同団客員コンサートマスターの浜野考史は、貴志の母校甲南学院の記念室まで足を運び自筆譜を精査したそうで、周到な弾き込みをうかがわせる立派なソロだった。この作品は、ベルクおよびプロコフィエフの「2番」と同年の1935年完成というのに、なぜ、貴志がかくも日本的旋法に執着したか、一方でヴィルトゥオジティの実現にもどれほど心を砕いたか、内藤音楽監督の精緻な棒と浜野の力演のおかげで貴志の意図したところが少しみえてきた。

ブラームス「第4番」は、初演数カ月後にヨアヒムの勧めで加筆されたものの最終的に省かれた冒頭部を加えた、おそらく日本初演！ わずか4小節の変格終止なので「第1番」のそれほど主部と不可分のものではなさそうだが、演奏史に一石を投じる試みとしておおいに讃えたい。ティンパニを正面に据え、敢えて中音弦を薄くした編成は、作品の輪郭をくっきりと浮き立たせていた。7月16日・東京芸術劇場 ●萩谷由喜子